

ソムの戦いから 100 年

大久保 明

(慶應義塾大学大学院法学研究科助教(有期・研究奨励))

去る7月1日、第一次世界大戦のソムの戦いの犠牲者を追悼する行事が英連邦諸国や西ヨーロッパの各地で行われた。最大の式典は、激戦地となったフランス北部ピカルディ地方のティエプヴァルにある慰霊碑で開かれた。そこで、フランスのオランド大統領、イギリスのキャメロン首相[当時、以下同]、チャールズ皇太子夫妻、ケンブリッジ公夫妻、コービン労働党党首、アイルランドのヒギンズ大統領、ドイツのケーラー元大統領をはじめとする1万人余りが出席し、ソムに従軍した兵士たちの手紙などを朗読する追悼行事が行われた。今年5月29日に行われたヴェルダンの戦いの追悼式典では、オランド大統領とドイツのメルケル首相が並んで追悼する姿が印象的であったが、ソムの追悼式にメルケル首相の姿はなかった。英仏メディアの報道によると、当初はオランド大統領も出席する予定はなく、EU離脱を問うイギリスの国民投票の後に急きょ出席を決めたのだという¹。フランスとドイツにおいて「ソム」は、「ヴェルダン」ほどの象徴的な意味を持っていないようである。一方でイギリスでは、エリザベス女王の出席する式典がロンドンのウェストミンスター寺院で開かれ、マンチェスターで行われた式典にはオズボーン蔵相やヨーク公が出席するなど、政界と王室が総出となって追悼行事に参加した。またイギリス各地において、舞台役者たちが第一次世界大戦当時のイギリス兵の格好に身を包む追悼の街頭パフォーマンスを行い、BBCニュースなどで広く報じられた。ヨーロッパではその前後に大きな事件が重なったため、今となっては印象が薄いかもしれないが、7月1日ばかりはソムの戦いの追悼が報道の中心であった。「ソム」は、なぜイギリスにおいて特別な意味を持っているのだろうか。

ソムの戦いは、1916年7月1日から西部戦線の北部で開始された英仏軍の攻勢に端を発する戦いである。同年2月に始まったドイツ軍のヴェルダンへの攻勢を跳ね返すのに手いっぱいであったフランス軍の負担を軽減するために、ソムではイギリス軍が主力を務めることとなった。1914年の緒戦において15万人余りの規模であった西部戦線のイギリス派遣軍は、ソム攻勢の開始時には100万人を超えるまでに増強されていた。その多くがキッチナー陸相の徴募キャンペーンに応じた一般市民の志願兵であった。カナダやオーストラリアといった帝国自治領からの派遣軍もソム攻勢に参加した。ソム攻勢は、イギリス陸軍がそれまで経験したことのない規模の作戦となった。そして、犠牲者数も空前の規模となった。攻勢の初日の7月1日に、イギリス陸軍は2万人近くの戦死者とその倍近くの負傷者を出した。1日の死傷者数としてイギリス陸軍史上最悪であった。ソム攻勢は同年11月まで続けられたが、英仏軍は最深部でも10キロメートルほど前進できたに過ぎなかった。3カ月余りの戦闘の死傷者数は、イギリス帝国兵約42万人、フランス兵約20万人、ドイツ兵約50万人と推計されている²。戦線を数キロメートル押し戻すためとしては余りにも重い犠牲であった。

¹ BBC News Website, 29.6.2016, <http://www.bbc.com/news/world-europe-36585199> [最終アクセス2016年8月9日、以下同]; LeMonde.fr, 1.7.2016, http://www.lemonde.fr/referendum-sur-le-brexit/article/2016/07/01/au-centenaire-de-la-bataille-de-la-somme-le-brexit-n-empêche-pas-l-amitié-franco-britannique_4961645_4872498.html. フランスの国家元首がソムの追悼式典に参加するのは1932年以來のことだという。

² David Stevenson, *Cataclysm: The First World War as Political Tragedy* (New York: Basic Books, 2004), pp. 136-7.

ソムの戦いは、従軍した兵士の心と体に大きな傷跡を残した。戦間期に活躍した詩人であり作家のロバート・グレイヴズは、陸軍大尉としてソムの戦いに参加した。自叙伝『さらば古きものよ』においてグレイヴズは、7 月 20 日の戦闘で自らが瀕死の重傷を負った瞬間を次のように描写している。

ドイツ軍はわれわれが身を横たえる尾根に機銃掃射を浴びせ、大隊は攻撃開始前に人員の三分之一を失い、私も負傷者の一人になった。

ドイツ軍砲兵隊は六インチと八インチ砲弾で猛攻を開始したが、攻撃は熾烈をきわめ、われわれは一気に五十メートル後退することを決めた。後退の途中、八インチ砲弾が私の三步後ろで炸裂した。炸裂音を聞いた途端、肩胛骨の間をどやされたような衝撃を覚えたが痛みはなかった。私は衝撃を爆風だと思った。しかし血が流れて目に入り、意識が朦朧としてきたのでムーディに向かって大声で、「やられた」と言い、それから倒れた³。

グレイヴズの所属する大隊は 16 人を除いて全員が死傷したという。

ソムの戦いは、次世代の政治指導者にも大きな影響を与えた。第二次世界大戦後にイギリス首相となるアンソニー・イーデンとハロルド・マクミランは、尉官としてソムに従軍した。マクミランはソムで重傷を負い、イーデンは所属大隊の兵員の半数以上が死傷する激戦を目の当たりにした⁴。彼ら 1890 年代生まれの世代は、大戦でとりわけ多くの犠牲を強いられ、「ロスト・ジェネレーション」とも呼ばれた。

イギリス人にとりソムの戦いは、第一次世界大戦を象徴する戦いとなった。歴史家 A・J・P・テイラーによれば、ソムの戦いが、「勇敢で頼るものがない兵士たち、へまをやる強情な将軍たち、成果はゼロ」という、第一次世界大戦のイメージを決定付けたのだという⁵。大戦以来イギリスにおいて「ソム」という言葉は、戦争の悲惨さと無益さを表す反戦の代名詞となった。

一方で、近年の軍事史家の間ではこの見方を修正する動きが出てきている。修正派のガリー・シェフィールドは、ソムの戦いは悲劇的ではあったが決して無益ではなく、イギリス陸軍が大陸諸国のスケールで近代的陸戦を戦うことを学ぶうえで不可欠なプロセスだったと説く。彼によれば、イギリスの将軍たちは無能ではなく、ソムの戦いは 1918 年に連合国が勝利するきっかけを作ったのだという⁶。シェフィールドはまた、第一次世界大戦はドイツとオーストリアによる侵略戦争であり、英仏にとっては自由民主主義の存亡をかけた戦いであったという観点から、イギリスが大戦で積極的な役割を担ったことを擁護している⁷。

しかし、修正派の説く「正戦」としての第一次世界大戦のイメージは記念行事には反映されていない。第一次世界大戦の記念式典は、戦争の起源や意味に関する説明には踏み込まず、戦場の兵士たちの払った犠牲に焦点が置かれる。これは、ナチズムに対する正義の戦いとしてのナラティブが強調される第二次世界大戦の記念式典とは対照的である。シェフィールドは、第一次世界大戦の記念行事にも、戦争の起源と意味に関する説明を取り入れるべきだと主張している⁸。

³ ロバート・グレイヴズ『さらば古きものよ』工藤政司訳、岩波書店、1999 年、下巻、69 頁。

⁴ D.R. Thorpe, *Supermac: The Life of Harold Macmillan* (London: Chatto & Windus, 2010), pp. 56-7; Anthony Eden, *Another World 1897-1917* (London: Allen Lane, 1976), pp. 98-102.

⁵ A・J・P・テイラー『第一次世界大戦——目で見える戦史』倉田稔訳、新評論、1980 年、148 頁。

⁶ Gary Sheffield, 'The Somme: An Exercise in Futility?', *History Today*, 66:7 (2016), pp. 10-19.

⁷ TheGuardian.com, 17.6.2013, <https://www.theguardian.com/commentisfree/2013/jun/17/1914-18-not-futile-war>.

⁸ Gary Sheffield, 'The Great War as a Just War', *History Today*, 63:8 (2013), p. 6.

だが、第一次世界大戦の起源は歴史家の間でも見解が大きく分かれる。ドイツとオーストリアが一方的な開戦責任を負うという見方がコンセンサスを形成しているとは言えない⁹。そのうえ、そのようなナラティブを記念行事に取り入れれば、第一次世界大戦の旧交戦国が肩を並べて犠牲者を追悼することが困難となってしまうだろう。

イギリスにとっての第一次世界大戦の追悼の課題はむしろ、イギリス兵の犠牲に焦点が偏りがちなナショナリズムにあるのではないだろうか。フランスとドイツが主導したヴェルダン記念式典をモデルに、ロシアを含めたより多くの国々が共同で追悼行事を催せるような枠組みを模索していくことが望まれる。

第一次世界大戦後にイギリス人は、「ネバー・アゲイン」のスローガンのもと、大陸規模の戦争には二度と巻き込まれまいと誓った。その思いは、国際連盟という平和維持機関への強い支持に反映された一方で、ヨーロッパの政治から距離を置く孤立主義的な傾向を復活させることにも繋がった。第二次世界大戦後には、後者に対する反省から、イギリスはヨーロッパとの防衛協力を進め、やがてはヨーロッパ統合のプロジェクトにも参画した。ソムの戦いから 100 年を経て、イギリスとヨーロッパの関係は再び岐路に立っている。

⁹ 現在英語圏で活躍している歴史家は独逸主要責任論をとる者が少なくないが、異論も多い。BBC News Website, 12.2.2014, <http://www.bbc.com/news/magazine-26048324>. 例えば、近年この分野のベストセラーとなっている Christopher Clark, *The Sleepwalkers: How Europe Went to War in 1914* (London: Allen Lane, 2012) は、開戦責任論には踏み込まないとしながらも、実質的には独逸の開戦責任を相対化する叙述を展開している。